

周作クラブ会報

(第75号)
2019年6月25日発行

周作クラブ

◆主な記事◆

『侍』の舞台、再訪	1・2面
長崎文学館便り	4面
周作クラブ長崎便り	5面
原稿発掘	6面
連載	7・8面
切支丹屋敷探訪報告	9面
私の中の遠藤周作	11面

報告 — 第20回遠藤文学原点の旅

『侍』の舞台、仙台・石巻再訪 支倉常長出港 — 5月の月浦に48名 加賀乙彦会長の特別講話も

第20回「遠藤文学原点の旅」が5月19日(日)と20日(月)にかけて、東北・仙台から松島、石巻を訪ねて行われた(参加者48名)。快晴にも恵まれた今回の旅のテーマは、『沈黙』と並ぶ遠藤周作の代表作『侍』。周作クラブでは2003年5月にも仙台を訪ね、『侍』のモデルとなった慶長遣欧使節・支倉常長の足跡を追ったが、今年はまだあらたな目的地も加えての再訪となった。参加の希望が多く寄せられ、バスをより大型のものに変更、それでもキャンセル待ちの会員が続出という人気だった。クラブとしては3・11の大震災後、初めての東北訪問である。

1日目 支倉時計、仙台市博物館、広瀬川

今回の集合地は新幹線の仙台駅だが、もつとも多い東京出発組は加賀乙彦會長はじめとする32名で、定刻9時24分に出発、長崎など日本各地から参加の会員との集合地・仙台駅で予定通り11時20分に合流した。

仙台を故郷とする二人の会員(伊東智香さん、益田恵さん)からの情報も得て、到着後、一日目のスケジュールを大幅に修正する。仙台三大祭り



支倉時計

のひとつ、初夏を彩る「青葉祭り」のための交通規制が思いのほか厳しい。午後になると「支倉時計」(ふらんどーむ一番町)へはバスで近づけそうもなく、急遽、最初の見学地に変更。

祭りの客が街路に溢れている。が、不思議なことに、通りの中ほどに建つ高さ3メートルほどの「支倉時計」(写真左上)に、通りかかる観光客は一人として眼を向けない。立ち止まって見上げるのは、周作クラブのメンバーだけである。あとで仙台バスのガイド嬢



支倉常長像前で 全員集合写真

(ただしこの方は青森出身)の語ったところによれば、「いまだかつてツアーでその時計を訪ねたことはありません。おそらく市民のほとんども知らないのでは……」

なるほど、法王謁見の場が刻んであるものの、時計塔は「歴史の遺物」というわけでもない。しかし今度の旅もやはりこうした、人の行かぬところ、見ぬものを求める旅なのである。

バスは5月の豊かな緑が両脇から被さってくるような広い通りを進んで、青葉城へ向かう。本丸跡に建つ会館での昼食後、仙台市博物館では国宝でありユネスコ記憶遺産でもある「支倉常長像」(クロード・デリユエ作)や「教皇パウロ5世像」(これも国宝)等を見て、博物館に近い広瀬川ほとりの「切支丹殉教碑」に立ち寄る。そして、そこからバスで1時間ほどかかる川崎町(旧支倉村)へ。常長の墓所の一つが、圓長山・円福寺にあるからだが、ここへ向かう車中、特別な時間が待っていた。

加賀会長による特別講話

「遠藤さんという作家には、登場人物をじつに生き生きと描く才能があります」と始まった講話は、結局、帰りに道にもまたがる1時間近いものとなった。

加賀氏は『侍』を遠藤周作の中期の傑作と評価しつつ、その前作『死海のほとり』から、「土地の〈層〉」のようにできあがっていく〈歴史〉を掘り起こすことによって底に眠っているイエスの技法に触れる。

しかし何より興味深かったのは、『侍』が準備されていた頃、加賀氏もまた支倉常長を書こうとして構想を練っていた、という告白だろう。「遠藤さんに先を越されて書けなくなつた」というが、遠藤周作の描く長谷倉が「刀に手をかけることも、声を荒らげること、愚痴を言うこともない朴訥寡黙な人」であるのに対し、加賀氏が抱いた支倉のイメージは「意志の強

い、武張^{ぶば}った、ちよつと怒ったような感じの人」と大きく異なっている点もやはり『高山右近』『殉教者』の作者らしかった。

『侍』刊行時の作者との対談を振り返りつつ加賀氏は、「長谷倉の信仰における曖昧さは、おそらく遠藤さんの意図」とし、対談の折の遠藤氏の言葉——「明確には信仰を意識させずに、ボヤツとしたなかで殺されていく感じにしたかった」に着目して「一粒の種が心のどこかに入っていく」という遠藤文学の特徴に迫る。

「ホンワカしたものの——と遠藤さんは、いつものおどけたような、ふざけたような調子で言いましたが、ふざけているときはマジメなのです、遠藤さんという人は……。真剣に考えぬいたうえでの言葉だったのでしよう」

『侍』の持つ、もう一つの意味が明らかされた6分であった。

圓長山田福寺でのハプニング

常長の墓のふもと、本堂前に皆がもどった頃、たまたま通りかかったご住職の、「特別にマリア観音像をお見せしましょう」という厚意に、一同は本堂内へ。普段は開かれることのない本尊脇の扉があげられ、脇仏であるマリア観音像と、宣教師を思わせる像が持ち出された。さすがに常長の地・旧支倉村と言おうか、隠れキリシタンの気配も濃厚な目前の二体に、誰もが遠藤文学の数々の受難の場面を想い、この特別な計らいに感謝した。



円福寺のマリア観音増

そして夕刻、旧支倉村からバスは松島へ。この日の宿は「ホテル大観荘」。高台に建つため、大震災の際には長い期間、避難・救護の場所として人々を受け入れたという。

日本三景の松島をのぞむ風呂に入れば、あとは夕食会である。今回初めて参加した会員8名の紹介と挨拶や、長崎からの会員などの近況報告もあって、なごやかな宴となり、加賀会長もこの晩はめずらしく場所を変えての二次会に参加して、東北の銘酒を愉しんでいた。

2日目

石巻へ——月浦とサンファン館

快晴だが、風が強い。松島の海に白波が立っている。

この日の目的地は牡鹿半島、石巻。バスが山道にかかると、斜面の緑に紫の藤の花が目だった。そして時折、同じ色をした花がちらほらと。

「下がっているのが藤、上を向いて咲くのが桐」と幹事の高橋千劍破さんが言う。藤も、桐も、いまが盛りのように山肌のあちこちに鮮やかな紫を浮かせている。

この日、バスの中では亀岡園子さんによる月浦に関わる作品の朗読が行われた。

慶長18年（1613）、支倉常長は石巻にある小さな入江・月浦（つきのうら）。『侍』では「月ノ浦」を出港した。藩主・伊達政宗の命をうけ、スペイン領メキシコ（ノベスピニア）との通商許可を得るための、結局は7年におよぶ旅である。

「侍も（略）これから別ねばならぬ牡鹿の山々を見つめた。五月の樹木は既に色濃く、山を覆っていた。これが彼が当分見ることのできぬ最後の日本の風景である」（『侍』第二章から）

その同じ五月に月浦を訪ねる——。もちろんそこは、45年前に遠藤周作も降り立った入江である。しかし3・11の津波で地形も変わるほどの被害を受けたと聞いていたから、今回は皆でそれを確かめると同時に、作者も立った牡鹿の小さな入江に自分たちも立ちたい、というのが今回の旅の目的の一つであった。

バスの運転手さんに無理を言っ降りた月浦に、やはり観光客の姿はなかった。護岸工事のためのトラックが何台か駐まり、静けさが支配している。我われの靴音と話し声だけが響く。かつてあった狭い岸辺はずでなく、新たに造られたコンクリートの護岸と防波堤が海と向き

合っている。それでも背後の山肌を見ると、ここにも紫色の藤が各所に目立ち、その下のからうじて生き残った岸辺には、青いツル桔梗が一面に咲いていた。

「使者衆たちをのせ、小舟はゆつくりと岸を離れ、入江の切りたった崖にそい静かに沖に進んでいく。（略）何年か後に自分たちが生きて帰国し、この入江にふたたび戻って来た時（略）とふと思った。／入江を出た瞬間、一昨日はじめて見た大船がふたたび眼に飛びこんできた」（『侍』第二章から）

その復元船「サン・ファン・パウティスタ号」を見学し、慶長使節団ミュージアムへ寄る。しかしこの船も、木工技術や維持費の問題でほどなく解体、遺棄されるという。

しかし——、旅から帰って編集部へ届いた手紙（会員・八十嶋章子さんから）の一節を最後に添えておきたい。「山河の地形や陽光は生きていますので、すね、月浦の水際に降り立って、それがわかりました」

（記／加藤宗哉、写真／清水優子）



月浦で45年前の遠藤先生と同じ場所に立つ加賀乙彦会長